2021 5/11 第71号

ふくしま 再生 短信

2021/4/10-11 飯舘村小宮・大久保金一農園訪問

マキバノハナゾノに集う

二〇二一年四月十日夕刻、飯舘村小宮の大久保金一農園、愛称・マキバノハナゾノへ。佐須小の満開の桜を堪能した直後だけに小宮の桜並木に大いに期待しての訪問であった。金一さんには直ぐにお会いできたのだが（写真1）。小宮の桜、五月十日頃満開とのことである。飯舘村は広い。佐須と小宮で気象条件がちょうどひと月違うのである。

七年前の二〇一四年、百人以上の有志による桜の植樹が小宮で始まる。ハナゾノ東斜面には一面の水仙の絨毯の両側にまだ幼い桜並木が展開している（写真2）。この日、金一さんが案内してくれたのは本宅前の「ちどり桜」。文京区本郷の居酒屋「ちどり」で募った五十余名の有志の寄付による植樹である。有志の中に再生の会の溝口勝さんの名がある。天にも届けと蕾をたっぷり蓄えた枝ぶりがみごとである（写真3）。

翌日、老若男女が集う小宮再訪。金一さんは十歳から野の花と出会い、以来七十年花を通して日本列島の北から南まで多くの花友と出会ってきた。桜並木北側に設置された四枚の看板に記された植樹参加者名簿で花友の広がりを見る（写真4）。

おやあのセゴビアが小宮に！ふと水仙の丘を見上げると心安らぐギターの音色。暫し聞かせていただく。「さすらいのギタリスト」こと渡邉塊（わたなべ・かい）さんとの出会い（写真5）。ハナゾノの磁場は成長を止めない。

（文責&撮影・若林一平）

人物紹介

2021 7/6 第72号

ふくしま
再生 短信

2021/2/21 相馬・玉野の椎茸農家工藤義行さん訪問

椎茸農家「妖精の郷」訪問

二〇二一年二月二一日午後、再生の会の小原壮二さん・飯舘村の菅野永徳さんらに同行して相馬市玉野のシイタケ農家（株）「妖精の郷」創業者・工藤義行さんを訪問。早速原木椎茸の栽培現場（写真1）とハウスの菌床（写真2）を案内していただいた。

工藤さんは二〇〇二年、農水省を退職して妻の菊子さん共々キノコの原木栽培の適地・阿武隈山系の相馬市玉野に腰をすえて事業開始。震災前には原木椎茸を主力に年商千五百万円にまで達していた。しかし、二〇一一年三月一一日の東電福島第一原発事故による放射能汚染がキノコ栽培のホダ木と原木の森林を襲い、キノコの出荷と原木入手も不可能に。だがここから妖精の世界に生きる工藤さんは真骨頂を発揮。始め他県の原木を導入していたが直ぐにここ阿武隈山系の原木再生に着手、既に三千本のクヌギ・スギを植林。里山再生百年二百年を生きる人には生き物への真の愛の姿がありました（写真3の右の方）。

土産に頂いた干し椎茸を戻していただく（写真4）。咄嗟に思いついたシイタケスライスの刺し身。まさしく絶品。四月には妖精こと工藤さん、再生の会に入会の吉報。これぞ誠にめでたきこと。

（文責＆撮影・若林一平）

2

1

4

3

2021 9/14 第73号

ふくしま 再生短信

2021/9/7 菅野宗夫さん・千恵子さん訪問

共に生きる営農

二〇二一年九月七日午後、飯舘村佐須の菅野宗夫農園を訪問。田圃はずっしりとした重い稲穂が見渡す限り広がりをみせていた（写真1）。美田に感嘆。ちょうど宗夫さんは薬剤散布の最中（写真2）、訪問をお願いしており直ぐに畦道に出てきてくださった（写真3）。散布していたのは稲の倒伏防止剤とのこと。この時期稲穂は重くなるので茎の負担は増す一方、倒伏の危険を防止する必要がある。もっとも防止剤はあまり効果を期待できないのだが。佐須米ファンの一人として米作りの見えない苦労の一端を改めて知ることとなったのです。

2

3

5

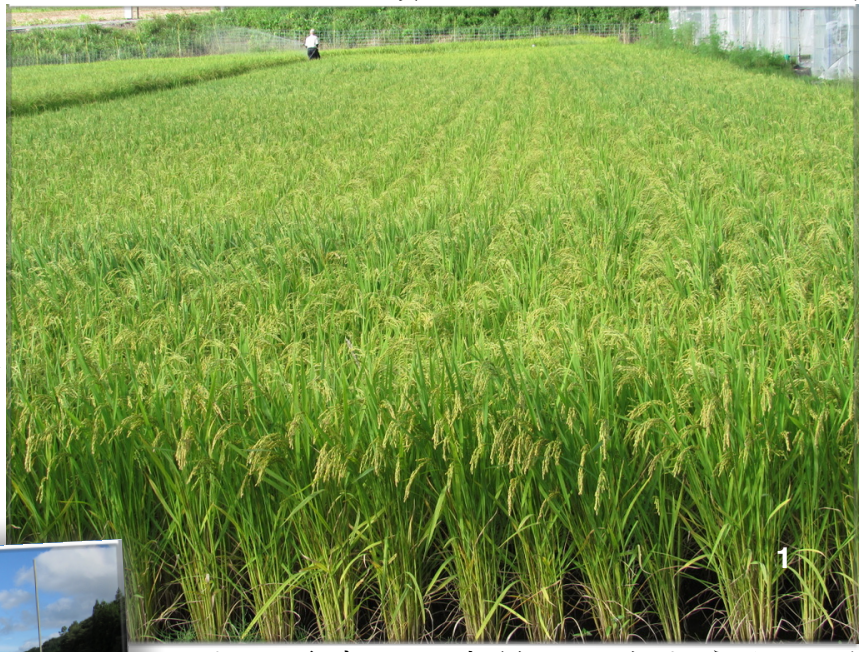
6

二千二十年からヒトメボレに移行した。前のコシヒカリも一部残して対照試験を実施している、田圃の真ん中でそんな話を伺っている最中に突然東大大学院・溝口勝教授の大声「宗夫さ～ん」。ミゾカメことリモート研究システムが双方向に進化していた（写真4）。

見学を希望した事業用ハウスへ（写真5）。何度か若い皆さんとのセミナーも実施された現場だ。極上の胡瓜がたわわに実る（写真6）。所望した一本。爽やかな風が我が身の中に心地よく広がる。

ここで宗夫さんの営農観を伺う。「営農はひとりで成し得るものではない」「営農の仲間がいてこそ」の世界なのだ。共に生きる世界。「千恵子あっての今」という宗夫さんの今日の言葉がミラクルの青空に飛翔した（写真7）。

（文責&撮影・若林一平）


1

7

4

2021 9/28 第74号

ふくしま 再生 短信

2021/9/5-7 防獣網設置、9/25-26 葡萄初収穫

初収穫 ワインへ一歩

二〇二一年九月五日～七日、飯舘村佐須の葡萄園の初収穫に先立って防獣網の設置作業。最終日は葡萄の葉が眩しい青空（写真1）。作業中に現れた宗夫さんの大型トラクターは葡萄園の周囲に繁茂した雑草を瞬く間に除草（写真2）。

1

2

二五日と二六日いよいよ収穫の日が来た。量こそ少ないがチームリーダーの小原壮二さんを先頭に三年かけて育ててきた葡萄たちがたわわに実る姿は壮観だ（写真3、4、5）。

3 4 5

葡萄説明　3：富士の夢　4：ピノーブラン　5：ヤマソービニョン

小原さん「みなさん、二〇一九年四月に定植した苗木が三年目を迎え、一昨日の九月二五日から二六日にかけて、その一部からブドウを収穫し、ワインにするため醸造所へ持ち込みました。

みなさんにはこの三年間：ブドウ畑の開墾に始まり、番線張りやその支柱の植え込み、電気柵の設置などブドウ畑作り、苗木の定植に始まり、芽欠きや剪定など苗木のお世話、病気や害虫との戦いとそのための農薬散布、ブドウの糖度の測定と収穫、など、一緒に取り組んできました。ありがとうございました。

今回、収穫したワインは単一品種では醸造の最低ロットに満たず、収穫したブドウを赤と白にまとめた上に、今まで何かと教えを下さった「ふくしま農家の夢ワイン」さんの栽培したブドウを収穫して、それを足しての醸造の委託となりました。

飯舘地産の美味しいワインを楽しむには、もう少し時間と経験が必要です。引き続きワイン造りにご協力をお願い致します。九月二七日」

夢ワインの熊谷耕一さんの応援を得て（写真6）、夢ワイン本社本田和弥さんの待つ醸造所へ、これぞ感動の瞬間（写真7）。

6

宗夫さん「新しくて大きなもの、未知のもの、小さな一歩、夢のある一歩。時間はかかりますが地域に紹介できる日の近からんことを。新しい風に期待します。」

（文責&撮影・若林一平）

7

2021 10/26 第75号

ふくしま 再生 短信

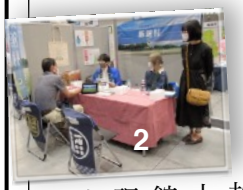
2021/10/7 ふるさと回帰フェアに飯舘村チーム登場

移住から空間創造へ

二〇二一年十月十七日、有楽町の東京国際フォーラムで開催された「第十七回ふるさと回帰フェア」（写真1）のセミナーにおいてふくしま再生の会理事長・田尾陽一さんらが「東日本大震災から十年 飯舘村からのメッセージ」と題する報告を行い、再生の会からも多数の会員が詰め掛けた。（写真7）

このフェアの主催は認定NPO法人ふるさと回帰支援センター（高橋公理事長）。飯舘村はブース開設（写真2）、総来場者八千余名（写真3）。

支援センター設立は二〇〇二年十一月、初代理事長は立松和平さん（現在故人）。東京と大阪に事務所をおき、東京交通会館の事務所に移住相談ブースを設置。

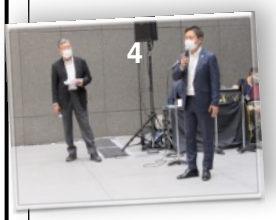


セミナー一部「原発事故から十年 飯舘村の現状と未来 自然と人間が共生する村へ」。田尾さん「今日は村から七人来場。私は今八十歳、三年前に高齢移住者の一人として村へ。十年間の自分の経験、活発に動いている若い人の声、先ず四十四歳の杉岡誠村長の映像メッセージを聞いて下さい。**杉岡村長〈キャンバスは真っ白、楽しいふるさとをつくる意欲ある人求む！〉**

現在の村民登録五千三十四人、居住千四百七十五人、編入者百八十九人。

二千十一年菅野宗夫さん訪ね現地で共感し協働する再生の会設立で合意。測定から始め健康医療ケアやハウス作りなど進め国際ツアーは二〇カ国から数百人受け入れ。アートディレクター北川フラムさんとの協働企画進行中。農水省の農泊事業を受けて風と土の家ほか二棟建設し稼働中。

一方村内のコメリの跡地空間プロジェクトが若い人たちにより開始され、飯舘村とは最先端の田舎、自然と人間が共生する循環型の村づくりめざします。」



村議佐藤健太さん「昭和三十六年二つの村から飯舘誕生。挑戦できることがゼロベースの魅力。アフターコロナは人間力が問われ、何でもできるのが百姓です。」（写真4、右健太さん・左田尾さん）

セミナー二部「移住者／多拠点居住者トーク」。移住者・地域おこし協力隊員・合同会社MARBLiNG（マーブリング）CEO松本奈々さん「私たちがソウゾウする「いなか」は、彩度が高い。ここには、一人ひとりが自分らしい生き方を選べる選択肢がある。多様な価値観を受け入れ、大切にする人たちがいる。」

二拠点生活者・矢野淳さん「会社を立ち上げ東京で仕事、他方飯舘には若手としてやれる仕事多い、村には東京には無い余白あり、生きるちからを頂いている。」（写真5、左松本さん・右矢野さん）

移住者・地域おこし協力隊員・会社経営・松尾洋輝さん（写真6）「元コメリホームセンター活用は最先端の田舎です。」

十年間廃墟になっていたコメリ跡地は松本さんたちのマーブリングの手によって再生、テナントのブース用資材が搬入されプレイベントも既に行われている。企業の事業拠点、研究施設、ツアー事業も計画中、実現の第一号はカフェ開店。

セミナー終え健太さん「三十四十年後の未来を今生きています」。

（文責&撮影・若林一平）